

## 令和6年度一般選抜個別学力検査【前期日程】「国語」

I (配点 90 点) 出典：佐藤仁『争わない社会 「開かれた依存関係」をつくる』

「自立」が重視される近代において、「自立」は善で「依存」は悪と見なされがちだが、そのような二項対立の関係性を、「依存関係」として見直すことを通して、争いを防ぐ可能性を探ろうとする論考である。現代の国際関係に関わる話題で、ウクライナ戦争など、私たちが直面している問題も例に挙がっており、関心を持って解答できたのではないだろうか。一方、関心を引かれるテーマである場合、読む際に自分の考えが先行してしまう可能性もある。現代文では、筆者の述べる内容を、しっかり理解することが最も重要なことなので、その点には注意が必要である。本文は、「序章」部分である。各章で論じられる問題点を抽出して論を展開しているのので、話題の転換やつながりを把握して読む必要がある。

解答の際、本文をほぼそのまま引用しているものが見られた。解答につながる重要な手がかりになる部分にたどり着いているのはよいことだが、その部分をどのように読んで、どう理解しているのか、本文を引用しているだけではわからない。本文の引用ではなく、その部分を手がかりにして説明してほしい。

問一 A 一掃 B 加担(「荷担」も可) C 皆無 D 絡(「搦」も可) E 高騰

漢字問題。全体的によくできていたが、Eの間違いが若干目立った。漢字問題では、一点一画をはっきり書いてほしい。

問二 「このような世界」とは、二十一世紀の現代の世界の状況を指している。それは、次の段落にあるように、筆者の子供の頃の「想像とは裏腹」の世界である。筆者が現代をどのような世界だと捉えているかを「端的に」答えてもらうことを意図した問で、この認識から、筆者の以下の論が展開されるのである。「端的に」答えてもらうために、解答欄を意図的に小さくしたのだが、意図に反して、詳細な解答もあった。過不足のない解答が理想的である。

問三 「カギ括弧付きで表記されている「問題」の根底には、何があると考えられているか」、つまり、その都度個別の「問題」として立ち現れる諸問題に共通するものは何かを問う問題。本文の「私たちがその都度、問題として取り上げる対象の根底には、いつも人間同士の争いがあり、それを促す「敵一味方」、「正義一悪」といった二項対立的な発想があった」という部分が手がかりになる。

問四 「現代の「依存」に「ネガティブなイメージが付きまとう」理由を説明する問題。「ここで大切なのは、これらのケースでは依存先の選択肢が限られているという点だ」と述べられているので、多くの解答が、「依存先の選択肢が限られている」「依存先の選択肢

が狭く限定されると、人々は逃げ場を失い、与えられた状況に身を任せるしかなくなってしまふ。選択肢があるように見えても、今の状態から抜け出すのが困難」という部分を引用していた。ここが重要な手がかりであるのは確かだが、選択肢の狭さの問題点は何だろうか。与えられた状況に身を任せるしかなくなるとはどのような状況だろうか。いわゆる「依存症」の一般的なイメージから、抜け出せないということを重視した解答が多かったが、選択の自由がないという点に着目してほしかった。

問五 「権力の集中に歯止めをかける方策」として想定されているものを問う問題。設問箇所段落の最後の「前もって争いを拡大しない社会を築く方法に知恵を集める」という部分を挙げた解答が複数見られたが、「権力の集中」が争いの道につながるものとされているので、そうすると、「権力の集中に歯止めをかける方策」と、「争いを拡大しない社会を築く方法」はほぼ同じことを言っていることになる。その「方策」・「方法」として想定されるものを答えてほしい。設問箇所前の段落の、「争いの激化を予防する「依存のネットワーク」が張り巡らされた社会」という部分が手がかりになる。

問六 「どのような自立も「何らかの依存関係の組み合わせ」から成り立っている」とはどのようなことか、言い換える問題。設問箇所すぐ後の段落を踏まえた解答や、また、圧倒的に多かったのが、設問箇所から三段落後の、「一見自立に見えるものが実は依存先の変更に過ぎない」という部分を引用した解答であった。これらの解答は、「依存関係」が個人から国家レベルまで見られること、「自立」と「依存」の関係がそれぞれ別のもではなく、切り離せないものであるということなどを答えてはいるが、「何らかの依存関係の組み合わせ」という部分が十分に言い換えられていない。本文のもう少し先の「無意識に築かれてきた依存のネットワーク」というところまでたどり着いてほしかった。

問七 「依存を嫌い、自立を崇め続ける」理由を問う問題。すぐ次の段落がヒントになるが、ここを、ほぼそのまま引用した解答が多かった。そのまま引用するのではなく、「依存を嫌い、自立を崇め続ける」ことが、近代社会とどうかかわるのか、近代社会において強調されるものの一方で、「依存」がどう位置付けられてきたかについて、引用部分を説明することが求められる。

問八 この問は、宮崎市定氏の言葉が、筆者（佐藤仁氏）のどんな考え方につながるヒントになったか、ということ問う問題である。宮崎市定氏の引用文の中での「スギナとツクシ」が何であるかを聞いているのではない。最後の一文、「地面の上」だけを見ていては物事の本質はわからない」とは、地面の上の「スギナとツクシ」は形の上からは別の植物のように見えるが、同じ地下茎から発生する植物であり、そのように別個に見える問題が実は根っこでつながっていることを述べている。この「スギナとツクシ」のたとえが筆

者の考えにどう重なるかを説明してほしい。宮崎市定氏の言葉の引用の前後に出てくる、「二項対立的な発想」、「依存関係」、「スギナとツクシ」、「援助しあいながら発展してきた」、などの言葉、また、ここまでに筆者が述べてきた「依存」と「自立」の関係性などを考えあわせて、筆者の主張をまとめることが求められる。

## Ⅱ（配点 60 点） 出典：中島広足『檀園文集』

江戸時代後期の国学者中島広足が著した『檀園文集』の中の「呼子鳥」の一節である。ある男が友人達と花見に出かけた帰りに、山中の草庵に女を見かけて興味を抱き、和歌を詠みかけるなどしてあれこれ言い寄ったが相手にされなかった。それでもなお、男の心残りの様子が「もの狂ほし」として笑われるという話である。王朝物語の「垣間見(かいまみ)」の場面を彷彿とさせるシチュエーションから、男が、この女性に対して物語的な想像をめぐらせて、自分の思い込みで一方向的に言い寄っている面白さをつかみ取ってほしい。

問一 基本的な古語を含む語句を現代語訳する問題。おおむねよくできていた。cは、「ともあれ、かくもあれ」の縮約であることを正確に理解せず、文脈からニュアンスで訳しているものが見られた。

問二 二つの「給ふ」について、敬語としての違いを問う問題。会話文中だから、誰と誰が話をしているのかをまず把握し、「給ふ」の直前の動詞の主語をおさえるとよい。Xはいわゆる尊敬。Yはいわゆる謙譲の用法である。おおむねよくできていた。

問三 男は草庵のたたずまいや女の容姿から期待するところがあったのだが、少しがっかりさせられたのだと言う。その理由を問う問題である。傍線の直前の部分を踏まえて、女が姿を隠そうとせず世間慣れしたさまであったことが答えられていればよい。「心劣り」の意味が理解できていない解答は点数がつかなかった。

問四 和歌を、比喻という表現技法に留意して解釈を行う問題である。「桜の花」が女、「山守り」はその桜の咲く山を守る人のことだから、主人の大徳、「下臥し」はこの男が女と一晩ともに寝ること、を比喻していることが把握できていればよい。上記三つを完璧に答えられず、部分点にとどまる解答が多かった。

問五 直前の男のことば全体をもとに、主人の大徳はどこに行ったのかとか、約束していたのに大徳がないのはどこかに隠れたのか、ということをも簡潔にまとめてあればよい。ただし、男は、女が主人もちだという前提でわざと女に言いかけ、女の口から主人がいることを言わせようとしている。男のそのような意図を理解できていない解答が多かった。

問六 和歌の解釈をする問題である。結句の「世をや尽くさむ」の助詞「や」に気づいていない解答が多かった。女が自分には主人などおらず「ひとり」桜を眺めて一生を終えるのであろうか、と言って、男の思い込みを否定する内容であることをおさえてほしい。

問七 男は女に否定されてもなお、女がとぼけているに違いないと思い込みを強めている。その文脈を踏まえ、直前の「さらぬ顔なれど、少しほほゑみたるしり目は、たがふべくもあらず見ゆ」を説明するかたちで解答すればよい。「見ゆ」が、～と見える、の意であることが理解できていないものは減点の対象となる。

問八 傍線部を正確に解釈する問題。「もこそ～活用語の已然形」が、～すると困る、の意で訳していることが必須である。その上で、「みいれ」が、ここでは狐や霊のような怪異が女に「魅入る」、すなわち、とりつく意であることを答えることが求められている。

問九 主に、問五～問七で問うた男と女のやりとりを踏まえ、男が女に否定されつつも思い込みを捨てず、あわよくば女のもとに一晩泊まろうと思って言い寄り、断られてしかたなく帰る時にもまだ諦めきれない様子であったということを、順を追って説明してあげればよい。「文章全体を踏まえて」とあるが、直前の和歌のみを解釈して答えとするものが見られた。

### Ⅲ（配点 50 点） 出典：『尹文子』より

ある人が、鳳凰だと言われて高額で購入した山雉がすぐに死んでしまったが、大金を失ったことには頓着せず、鳳凰を王に献上できなかったことをただ嘆いているということが王の耳に入り、それに感動した王は手厚く褒美を与えた、という話。売買や授与について、「誰が」、「誰に」、「何を」を正しく読み取って全体の内容を理解してほしい。なお、鳳凰は優れた天子が治める平和な世に出現するとされ、その姿を王に見せることは、希少な生き物を献上する以上の意味がある。

問一 基本的な読みの問題。正答率は非常に高かった。

A なんじ／なんぢ B しかり（と） C ただ

問二 解釈の問題。後半部分は直訳すると「今これを直接見ている」だが、前半の「いるということは聞いていた」との関係から考えれば、これがどのようなことか解釈するのは難しくない。

問三 現代語訳の問題。「請」、「与」ともに主語は「担雉者（雉を担ぐ者）」。「之」の指示対象は「(山) 雉」。対象が特定できる語が選択されていれば、他の語を用いてもよい。「請」

については、「倍ヲ加フルヲ請ヒテ」と読ませるように訓点がある以上、「金銭の要求」ではないことに注意してほしい。「加倍」が「二倍分を足す（つまり三倍にする）」のか「一倍分を足す（つまり二倍にする）」のかという点は不問とした。傍線部の前後に書かれている状況をすべて説明しようとする解答が多く見られたが、傍線部を過不足なく、意味の通るように訳してほしい。

問四 解釈の問題。「路人」の話が、本物の鳳凰を買い取って王に献上しようとした話として伝わっていったこと、王に献上しようとしたその気持ちが尊いものとされたこと、の2点をおさえてほしい。

問五 書き下しの問題。たとえば「王其の己に献らむ（ん）と欲せしに感じ、召して厚く之に賜ふ（う）」のように書き下してあればよい。「賜」は「賜ぶ（たぶ）」、「賜す・賜わす（たまはす・たまわす）」でもよい。「賜之」を「之を賜ふ」とする解答が多く見られたが、「之」の指すもの（褒美の金品を表す語）が文脈上に提示されていないため、適切でない。

問六 現代語訳の問題。「鳥」は「路人」が買った山雉のことで、王が与えた褒美が山雉を買った際の金額を超えていたということ。たとえば「山雉を買った金の十倍以上であった」のように訳してあればよい。「十倍」か「十倍以上」かは問わない。「王が鳳凰（山雉）を買い取った金額の十倍だった」、「王が十倍の値段で鳳凰（山雉）を買った」のように、「路人」が王から鳳凰（山雉）の対価として金品を受け取ったとする解答が散見されたが、問四、問五を踏まえ、王が褒美として与えた金品について述べているということを読み取ってほしい。